

Title	小瀧昭夫教授の略年譜と業績
Sub Title	Chronologie et travaux du professeur OGATA Akio
Author	
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.49/50 (2009.) ,p.1- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges dédiés à la mémoire du professeur OGATA Akio = 小瀧昭夫教授追悼論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20091225-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小瀧昭夫教授の略年譜と業績

- 1944年9月28日 栃木県宇都宮市に生まれる
- 1969年 慶應義塾大学文学研究科仏文学専攻修士課程修了
- 1969-1971年 フランス、グルノーブル大学社会哲学科に留学
- 1972年 慶應義塾大学経済学部助手に就任
- 1975年 慶應義塾大学文学研究科仏文学専攻博士課程単位取得退学
- 1977年 慶應義塾大学経済学部経済学部専任講師に就任
- 1978年 慶應義塾大学経済学部助教授に就任
- 1978年 フランス、パリ第7大学に留学
- 1980-1983年 慶應義塾大学経済学部学習指導副主任を務める
- 1983-1985年 慶應義塾大学学生部委員（日吉支部）を務める
- 1985年 日吉紀要刊行委員会の一員として学部の枠を越えた専門分野別『日吉紀要』の創刊に関わり、『日吉紀要・フランス語フランス文学』第1号を発刊
- 1985-1987年 慶應義塾大学経済学部学習指導副主任を務める
- 1989-1996年 慶應義塾大学通信教育部学習指導副主任を務める
- 1990年 慶應義塾大学経済学部教授に就任
- 1991-1993年 慶應義塾大学経済学部運営委員を務める
- 2002-2003年 慶應義塾大学教養研究センター副所長を務める
- 2003-2008年 地域連携交流プロジェクト「ヒヨシエイジ」を立ち上げ、毎年1回開催する
- 2008年10月14日 逝去

業績

I. 著作

著書

『わが思索のあと』（対談集、会見者；小林秀雄ほか12名）（出帆社、1976）

『幻想と断片』（芸立出版、1985）

編著

『19世紀フランス文学事典』第1巻（慶應義塾大学出版会、1996）

『19世紀フランス文学事典』第2巻（慶應義塾大学出版会、1998）

『19世紀フランス文学事典』（慶應義塾大学出版会、2000）

II. 翻訳

モーリス・ツェルマッテン『晩年のリルケ』（伊藤行雄／小潟昭夫訳）（芸立出版、1977）

ジョルジュ・ダリアン『泥棒』（国書刊行会、1985）

『アイスランドのハン』（「ヴィクトル・ユゴー文学館」第7巻）（潮出版社、2000）

『詩集 サテュロス』（「ヴィクトル・ユゴー文学館」第1巻）（潮出版社、2000）

『死刑囚最後の日』（「ヴィクトル・ユゴー文学館」第9巻）（潮出版社、2001）

ロベール・ドゥルーズ『世界ミステリー百科：ミステリーを創った世界の作家たち』（JICC出版局、1992）

ジャック・ブロス『世界宗教・神秘思想百科』（JICC出版局、1993）

Ⅲ. 論文・解説

「『ポール・ロワイヤル』研究への道」

『藝文研究』第28号(1970)、pp. 48-65

« Imaginaire et Écriture des Misérables »

『フランス語フランス文学研究』第25号・第26号(1975)、pp. 25-26,
16-33

「幻視者ユゴーの想像的宇宙を求めて——ヴィクトル・ユゴー研究の現状」

『慶應義塾大学経済学部日吉論文集』第20号(1976)、pp. 51-67

« Une étude sur le premier roman de Victor Hugo

— Contribution à l'archéologie du roman (1) »

『慶應義塾大学経済学部日吉論文集』第27号(1981)、pp. 1-148

« Une étude sur le premier roman de Victor Hugo

— Contribution à l'archéologie du roman (2) »

『慶應義塾大学経済学部日吉論文集』第28号(1981)、pp. 1-124

「ヴィクトル・ユゴーの想像的宇宙——『笑う男』の幻想性」

『慶應義塾大学経済学部日吉論文集』第29号(1982)、pp. 53-99

「『ノートル＝ダム・ド・パリ』における石の詩学——ピエール・パヴェ・パリ」

『藝文研究(白井浩司教授記念論文集)』第44号(1982)、pp. 105-121

« Sur les épigraphe de *Han d'Islande* de Victor Hugo »

『フランス語フランス文学研究』第40号(1982)、pp. 44-76

「日本におけるヴィクトル・ユゴー—1—」

『慶應義塾大学経済学部日吉論文集』第31号(1983)、pp. 27-50

「稲垣直樹「ヴィクトル・ユゴー『アイスランドのハン』の成立過程にかんする研究——〈暗黒〉ジャンルと王党派思想」

『慶應義塾大学経済学部日吉論文集』第31号(1983)、pp. 56-61

「日本におけるヴィクトル・ユゴー—2—翻訳家森田思軒を中心に」

『慶應義塾大学経済学部日吉論文集』第33号(1984)、pp. 104-79

「ファンチース考」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第4号(1987)、

pp. 293-281

「『諸世紀の伝説』序説」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第10号（1990）、
pp. 126-206

「都市の中の映画・映画の中の都市（映画の現在〈特集〉）」

『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第6号
（1990）、pp. 127-141

「F. トリュフォー 『柔らかい肌』を愛撫する」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第12号（1991）、
pp. 267-248

「都市を論じるための覚書（東京湾ウォーターフロントの今昔と未来〈特集〉）」

『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第9号
（1991）、pp. 66-78

「フランソワ・トリュフォー『大人は判ってくれない』に関する批判的な作品（映画の現在-2-〈特集〉）」

『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第12号
（1993）、pp. 68-81

「ヴィクトル・ユゴーの霊的指導者像—— Les Mages から Les Génies へ」

『藝文研究』第63号（1993）、pp. 186-174

「人類の創造へ——梅原猛との交点から：梅原猛古希記念論文集 梅原猛と文学創造」

『中央公論社』（1995）、p. 572

「ヴィクトル・ユゴーにおける近代——群集・民衆・芸術・社会主義・飛行船」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第20号（1995）、
pp. 46-64

「映画の中の都市——都市のポエチカ：都市と文明（寺尾誠教授退職記念論集）」

ミネルヴァ書房（1996）p. 364

「アンドレ・デルリュウ：『捨て子物語』」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第22号（1996）、
pp. 132-125

「エレクトラを読む」

『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第19号
（1997）、pp. 141-184

「ヌーヴェル・ヴァーグの映画音楽（その1）」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第34号（2002）、
pp. 123-141

「ヴィクトル・ユゴーと雷の詩学」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第38号（2004）、
pp. 11-45

「詩と映像と音響の融合——表象として（その1）」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第44号（2007）、
pp. 19-48

「詩と映像と音響の融合——表象として（その2）」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第45号（2007）、
pp. 21-75

「結婚、不義密通そして愛——ユゴー・サンド・ドビュッシー（その1）」

『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第47号（2008）、
pp. 41-68

IV. その他

「メディア都市パリの現在」(CD-ROM) (1999)

映像と音楽の融合プロジェクト「魔神～Les Djins」(2004)・「文学と音楽」
(2005)をパリ第3大学にて発表

写真展：「メディア都市パリの現在」(1999、日吉来往舎ギャラリー) など

（この「略年譜と業績」は、小淵昭夫先生ご自身が残されたデータからご長男小淵義観氏が作成されたものを基にして、紀要委員林栄美子が編集した。）

追記：いわゆる「業績」としては記録されない小潟さんの「功績」について

小潟さんの年譜と業績表の原稿を作成しつつ、しきり浮かんでくる記憶の断片は、小潟さんという方がそういう形では記録に載りにくい類の仕事のなかで、発揮していらした独特の個性にまつわることであった。そうした折々の中でこそ、小潟さんは最も鮮やかなイメージで存在していたように感じられる。(この文中では、生前と同様に「小潟さん」と呼ばせていただくことをお許し願いたい。)

「自由研究セミナー」(元の名称は「自由研究」)は経済学部の授業の特徴の一つであり、慶應義塾大学の教養課程における少人数セミナー興隆の先駆となった科目であるが、成立当初から熱心に「自由研究」を担当されてきた教員の一人が小潟さんだった。小潟さんの担当する「自由研究セミナー」はとりわけユニークであった。何より小潟さんは、学生たちの様々な創作意欲を目覚めさせ、刺激を与えることに長けていらっしやった。経済学部の既成の枠内ではなかなか発揮できないような能力を持つ学生たちが、多く小潟さんのもとに集い、彼らはその能力を存分にのばしていくよう、常に彼らと共に実践的に活動しつつ鼓舞しておられた。ご自身も次々にいろいろなものに出会う感度の高いアンテナを備えておられ、エネルギーに、新しいジャンルにチャレンジされていく方だったが、そういう小潟さんに引っ張られるように、学生たちも旺盛な意欲を持って、自分なりの表現方法を見出していたようである。実際、小潟さんの「自由研究セミナー」をきっかけとしてアーティストの道に進んだ卒業生もいる。

現在のような『日吉紀要』が出来る以前には、日吉キャンパスの教員には、学部別の紀要しか存在しなかったが、学部ごとの縦割りの組織を越えて横のつながりを作り、研究分野ごとに専門の「紀要」を作ろうという機運が起こることによって、『日吉紀要』は生まれた。その立ち上げに尽力されたお一人が小潟さんであった。この『日吉紀要・フランス語フランス文学』の表紙

のデザインをなさったのも、私の記憶が正しければ、小潟さんご自身である。

また、授業や専門の研究とは別に、日吉キャンパスの活性化につながるような数々の催しを企画なさり、さらに、大学の枠を広げて、大学と地域の交流をはかる運動もされていた。その成果の一つが、日吉の街の住民と慶應の学生・教員の有志が一体となって日吉の街を盛り上げていこうというプロジェクト、「ヒヨシエイジ」であった。2003年の第1回から、毎年1回開かれており、様々なイベントやワークショップ、アート・パフォーマンスなどを通じて、地域社会と大学の連携が進められてきた。小潟さんの遺志を継ぐ人々によって、幸いこのプロジェクトは今後も存続していくことになった。

大学と社会との交流という点では、一般社会人を対象として毎週土曜日に日吉キャンパスで開かれていた「横浜市民講座」を「日吉キャンパス公開講座」へと発展させ、長年にわたって企画・実行してこられたのも小潟さんであった。

通信教育にも熱心にとりくまれており、様々な都市を訪れるのが好きだった小潟さんは、地方出張もよくなさり、各地の慶友会でも人気教授であった。日吉で小潟さんの関係した催しを開くと、いつも小潟ネットワークによる多数の学外の方々（遠方からも）おいでになるのを目にしたものだった。

このような、独自の広がりを持ったジャンル横断的な活動こそ、小潟さんの特徴であった。小潟さんの「つながり」をつくる力、人々を「まきこむ」力。「つながる」「まきこむ」はヒヨシエイジのコンセプトでもあったようだが、それを象徴していたのが、まさに小潟さんの活動形態であったと言えるだろう。

(林 栄美子)